

『若菜集』の実り、恋愛詩の展開

藤岡加世子

明治二九（一八九六）年九月一日、東北学院始業式に間に合うように仙台市内に入った島崎藤村は、翌三十年七月一日に上京し、再び文京区湯島に在住する。その間の十カ月、作文の教員の傍ら、仙台市の廣瀬川の畔に建つ家で、次々と詩を書き、東京の雑誌に発表する。それらの詩が第一詩集『若菜集』（明治三十（一八九七）年八月二十九日 春陽堂）として刊行され、藤村が文壇の人として開花することになる。

「若菜」とは春の七草を指し、不老長寿を寿ぐ祝福の歌言葉として上代より用いられて来た。「若菜集」に収録されている全五二篇は、二篇（「夏の夜」「深林の逍遙」）を除き、五十篇は七つの仮題を付された上で誌上に発表されている。「若菜」は、「文学界」第四九号（明治三十年一月）に掲載された六篇の詩の仮題であり、それが第一詩集の表題と位置付けられる。

従来、「若菜集」を生み出した最大の要因は、藤村が五十代に加藤静子と出会い、彼女と深く関わり合うまでは心の中を離れることのなかった佐藤輔子への恋愛感情に拠ると言われている。佐藤、加藤、両者の女性とも控えめでおとなしい性格の一方で、芯はしっかりとした強さを持っていたこと、学問好きな

こと、キリスト教（プロテスタント）の信者であったこと（加藤静子は四谷のイグナチオ教会で洗礼を受け直し、カトリック信者として改宗する）、体が頑健ではなく弱かったこと、ほぼ共通事項が多い。「若菜集」の詩群が仙台で生み出される前年の明治二八年八月一三日、佐藤輔子は急逝している。佐藤は結婚しており、妊娠中の死去であった上に、藤村と佐藤との間では、経済的、家庭的な事情により結婚を諦めたものの、本心では心が通じ合っていることを互いによくわかっている、という深い理解が、物理的距離があろうと持続していた状態でもあった。言ってみれば、藤村にとっては恋愛感情が凍結されたようなものであり、佐藤が死去したためにその感情も行き場のない八方塞がりとなってしまったことはよく推測できる。

『若菜集』の詩の創作が、閉じ塞がって居た彼の心を開放させたが、藤村が四十代にフランスのバリへ三年間在住した際に、最も辛い時は佐藤輔子を思い出していたことは、当事者でなければ計り知れない恋愛感情の結晶があったと素直に見るべきであらう。藤村が五十代で出会った加藤静子が、佐藤輔子との間で藤村が果たせなかった恋愛と結婚との現実的なバランスをも

たらしたと云える。

フランスで佐藤を思い出していた藤村は、第四詩文集『落梅集』（明治三四（一九〇一）年八月二十五日 春陽堂）以来、約十五年ぶりにパリで詩を創る。藤村の場合、恋愛感情は詩の創作の動機づけとなるが、十五年という時を隔てているからこそより証拠づけられる。それならば、『若菜集』では、表題とされた仮題「若菜」の詩篇において、恋愛詩はどのように生み出されたのであろうか。

「若菜」の詩篇六篇のうち、二篇（「天馬」「若水」）が恋愛詩に該当する。ここでは、「若水」を取り挙げる。

若水

くめどつきせぬ／わかみづを／きみとくままし／かのいづ

み

かわきもしらぬ／わかみづを／きみとのままし／かのいづ

み

かのわかみづと／みをなして／はるのこころに／わきいで

ん

かのわかみづと／みをなして／きみとながれん／花のかげ

若水とは、元且に汲む、一年中の邪気を払う縁起の良い水である。若水として汲むことが出来、決して涸れない特定の泉を詩中の男性は知っており、「きみ」である恋人の女性とその泉へ行き、一緒に若水を汲み、飲みたいと望んでいる。彼と彼女とが一緒に泉の水を飲んで初めて、二人が一つの（若水）となることが第三連からの展開となり、恋愛関係に神聖で誠実な安定が付与される。

詩中の男性が、恋人の女性と（若水）と成って流れていき

いた場が何故、咲いた花そのものではなく、「花のかげ」という、咲いた花の隠れて見えない、光の当たらないところなのであろうか。『若菜集』では、和歌集、物語、漢詩文、浄瑠璃といった日本文学のみならず、聖書、讚美歌（聖歌）、英文学といった外国文学も詩の言葉の背景を与えている。関良一氏は「若水」注釈で「花のかげ」の言葉の背景に、前句の「きみとながれん」と関連して落花流水の言葉合わせがあることを解釈している。落花流水に、男性が女性を慕う心があることにより、

女性も男性を慕う心が生じて、互いに思い合う感情が存在するようになる、という意味を与えたのは、宮崎湖処子である。藤村は宮崎が北村透谷の友人であったことから、彼を留意していたが、平田秃木や馬場孤蝶といった「文学界」メンバー全体への感化をも宮崎はもたらしていたので、藤村が落花流水の言葉のイメージを宮崎からヒントを得たことは考えられる。一方で、「花のかげ」のみに注目してみると、花蔭の最古の典故は『後撰和歌集』巻二「春中」六二番「春くれば木がぐくれおほきゆふづく夜おほつかなくも花かけにして」という、よみ人しらずの歌に挙げられる。春が来ると、葉が繁って木陰に隠れてしまうことが多い夕暮れ時の月であるけれど、繁った木に花が咲いているなら、咲く花に隠れてなおさら夕暮れ時の月がほんやりとしか見えないという歌意である。花蔭は、葉の繁る木や花が咲いていることを示し、春であることを揺るぎなく伝える状態を指すことになる。男性が恋人の女性と花蔭に向うことは、二人は一緒に春の状態のままですっと居るのだ、という意味であり、

「花のかげ」は三連目の第三句「はるのころ」を成就させる結句ともなる。

「若水」は、何ものにも邪魔されることのない、安定に満ち溢れた恋愛を歌っており、ロマンティックな明るさで見通されている。第一詩集の表題に藤村が選んだ「若菜」に、このような恋愛詩が組み入れられていることは、「若菜集」全体の基調を成す上で、恋愛詩を観ることが優勢と考えることが出来る。

「若菜集」の「序詩」もまた、詩集全体の基調を伝えている。

序詩（無題）

ころなきうたのしらべは／ひとふさのぶどうのごとし／
なさけあるてにもつまれて／あたたかきさけとなるらむ
ぶどうだなふかくかかれる／むらさきのそれにあらねど／
ころあるひとのなさに／かげにおくふさのみつよつ
そはうたのわかきゆえなり／あじわいもいろいろあさくて／
おおかたはかみてすつべき／うたたねのゆめのそらごと
すべて平仮名の表記であるが、詩集の六回の改版中で、岩波文庫に収めた「藤村詩抄」（昭和二（一九二七）年七月十日初版）より、漢字交じりの表記を施している。読者の読みやすさを考慮したのであろうが、これは藤村の詩が有名となった故の手直しと考える。初出において、序詩は「おとめごのうたえるうたは／ひとふさのぶどうのごとし」と書かれていた。無邪気な女性の手による詩を想定していたことになる。藤村は（素直で無垢な部分のある女性）の存在を自己の詩の世界に必要不可欠と考え、初出では仮題の「序詩」に過ぎなかった内容を、詩集全体の冒頭に置いて、「若菜集」の視点には女性的な手節

が要ることを外せないことを、「女手」と呼ばれた平仮名の文字表記によって表現したものとと思われる。

【若菜集】の詩一つ一つを葡萄にたとえ、大半は未熟で、眠気のある夢の中の、はかなげな言葉に過ぎないことを伝える一方で、第一連に書かれるように、理解と好感を詩に抱く読者を通しては、未熟な詩も美味しい葡萄酒のような成熟を感じる言葉と受け取るであろうと表現する。読者次第で、お酒にもなり寝言にもなるほど、振り子のある詩の数々ということになるが、「あたたかきさけ」である美味しい葡萄酒にたとえられる、成熟した言葉に属している詩も含まれていることは詩集を振り返った上で自ずと読者が判断することに序詩の解釈が導かれている。眠いような夢の言葉でありながら、成熟さを兼ね備えていることを捨てたくは無い希冀、それが序詩の意味であり、【若菜集】の詩群を性格的に表現している。

藤村が自作の詩の中で最も好きな詩であると伝え、仙台に赴く前に書かれたものの、「若菜集」の基調として選集されたのが、「流星（りゅうせい）」である。

流星（りゅうせい）

門（かど）にたち出でただひとり

人待ち顔のさみしさに

ゆうべの空をながむれば

雲の宿りも捨てはてて

何をかこいし人の世に

流れて落つる星一つ

夕暮れ時に、一人の女性が我が家の門前で、恋人の男性がま

だ現れないことを寂しく思いながら黄昏の空を見上げると、世の中を恋しく思うかのように、流れ星が一つ落ちて来たという歌意になる。恋人がまだ目の前に現れてくれない「さみしさ」をすぐに解消させたのは流星を見たことにある。居所である空の上をきつぱりと離れても、女性の居る世の中へ流れて落ちてきた星は、恋をしている女性にとって、まるで自分を慕って流れ落ちて来たように感じる。流星は、恋人の男性自身を暗喩している。流星は、人智ではどうにも出来ない天体現象を指すため、女性が恋人の男性と結ばれることは、天の定めであると読める。男性が星に譬えられていることから考えられるのは、女性と男性とでは、社会的身分や立場がかなり異なるという可能性である。そうなれば自然に年齢差があることが考えられ、男性の側が（流星）のように自分の立場はそのままでありながら、女性の立場と同じ位置へ男性が自分自身を馴染ませ、恋人の女性に恋愛感情を伝える、という読み方へも通じる。

「流星」は、けなげで優しい、運命的なロマンスを歌っている。藤村が最も「流星」を好んだ本当の理由はわからないが、この詩で歌われている読みの延長線上に、加藤静子との恋愛と結婚が閃く。藤村が明るい詩聖であることを伝える詩である。

『若菜集』に収録された五二篇のうちで最も年代の古い詩「夏の夜」は、二番目に古い詩である「流星」の次に編まれている。「流星」が女性からの視点であるのに対し、「夏の夜」は男性からの視点の恋愛詩となる。

夏の夜

君と遊ばん夏の夜の／青葉の影の下すずみ／短かき夢は結ばずも／せめてこよいは歌えかし

雲となりまた雨となる／昼の愁いはたえずとも／星の光をかぞえ見よ／楽みのかず夜は尽きじ

夢かうつつか天の川／星に仮寝の織姫の／ひびきもすみて

こいわたる／梭の遠音を聞かめやも

初出は「世界之日本」五号（明治二九年九月）に掲載されている。「夏の夜」を除き、『若菜集』の五一篇の詩は、星野天知が創刊した「文学界」に初出掲載を行っている。平岡敏夫氏によれば、「文学界」の区分は同誌終刊号にある「文学界総要目」を一般的に採用している。第一期は北村透谷の評論（「内部生命論」等）、第二期は樋口一葉の小説（「たけくらべ」等）、最後の第三期に藤村の詩を中心として区分される。当時の文学上の登竜門的な意義が「文学界」にはあったが、「夏の夜」だけは初出が異なる上に、原詩の最後の連のみを、表題詩の内容として『若菜集』に収めている。

原詩「夏の夜」は、母と息子との対話形式で語られる。母に歌ってほしいと言われ、息子は自分の書いた詩を朗読する。朗読部分が原詩での最後の連となるため、構造的には異なる世界観が同時に存在しているのが原詩である。

息子が母に歌う詩は、酔いが醒めることはない「涙に濁る吾が酒」と表記されている。恋愛内容に満ちた詩は、彼にとってはその恋愛体験を伝えたものである。彼が胸に抱いている彼女への恋愛の気持ちは生涯続くことを歌って居る自分の詩を、

酔いの醒めない恋愛関係の故に涙することや泣くような思いにも滲む、彼自身が創ったお酒に譬えて表現している。詩をお酒に譬えることは、先に述べたように、序詩に表現がある。序詩は『若菜集』の詩全体のトーンを伝えており、原詩「夏の夜」に書かれる息子の詩がこのトーンに合致する内容として、詩集に組み入れられたと考えられる。

『若菜集』に収められた「夏の夜」では、第三連に歌われている七夕の彦星と織姫との関係から、詩の歌い手である男性と「君」である女性との恋愛関係に当てはめている。本来、中国からの伝説である七夕は、女性から男性に逢いに行くのが一般的であるが、日本では古代より、男性から女性へコンタクトを取る事が普通である。七夕の本来の意味は機を織る女性を指し、織姫を主体とするので、藤村は七夕の原典を理解の上で、織姫の視点を中心にして第三連を書いたと思われるが、詩全体は、男性が恋人の女性に恋心を伝え聴かせるといふ、日本の七夕に即した視点で貫かれている。

男性にせよ女性にせよ、互いに現実の世界が順調という訳でもなく、(雲)や(雨)に譬えられるような苦勞があり、晴れない思いや心配を感じる現状が互いの場で続いている。その中でも、二人が短い時間であれ一緒に逢えば幸せな気持ちに尽きない。「夏の夜」は歌言葉「夏夜(なつこのよ)」として存在し、短く明けやすいものとして詠まれている。藤村は「万葉集」、「古今和歌集」を始めとする和歌集(「貫之集」などの私家集も含めて)を多岐に詩の表現のヒントにしている。「夏の夜」といふ表題は、詩の内容だけであっても、七夕の言葉に意味を置

き換えられるが、歌言葉からの裏付けがあると解釈を加えれば尚更、第一連の第四句と第三連との関係が密接であると読める。日中の現実ではままならないことが多いものの、制約があることも、夜のひとときに互いの恋愛感情が純粹に通行していることをわかりあうことを、第三連の七夕の表現を通して恋人の女性に男性はロマンティックに話す。第二連の第一句と第二句に表現されるような、現実のつらさが彼と彼女とは障害であるというよりは、必要な愁いとして受容されていることが、「夏の夜」の独自性と考えられる。男性にとつては、現実の愁いがあるうとも、彼女と恋心がつながっていることの方が大切という選択が成されている。原詩「夏の夜」では、『若菜集』に収められた「夏の夜」に該当する(息子の詩)には、涙が入っていることが語られていると先に述べたが、歌い手である男性の選択は、それを彷彿とさせる内容であると考えられる。恋愛感情と涙との親密さについては、「相思」においても歌われている。

相思

髪を洗えば紫の／小草のまえに色みえて／足をあぐれば花鳥(はなとり)の／われに従う風情あり

目にながむれば彩雲の／まきてはひらく絵巻物／手にとる酒は美酒(うまさけ)の／若き愁をたたうめり

耳をたつれば歌神の／きたりて玉の簾(ふえ)を吹き／口をひらけばうたびとの／一ふしわれはこいうたう

ああかくまでにあやしくも／熱きころのわれなれど／われをし君のこいしたう／その涙にはおよばじな

相思相愛の二人の様子を、恋する男性の視点から歌っている。第一連では、彼の眼に映る恋人の女性の姿が語られる。洗った髪だとわかる彼女の顔の様子は、紫草の可憐な花が、彼の眼の前で白い色を映えさせて咲いているように、彼には見えている。「紫」は紫草を指し、山地で夏に小さな白い花を咲かせ、根を紫色の染料として重用する。また、歌言葉に相当し、いとしい女性そのもの（或いは大切な女性そのもの）を意味する。「古今和歌集」卷一七「雑歌上」八六七番「紫の一本ゆえに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」という和歌が当時たいへん有名になり、その影響から（紫のゆかり）という表現が起る。好きな女性に縁のある人や物は、好きな女性とつながっている。親しみを心に感じる、という意味内容から、紫と言えば好きな女性という定義になった。藤村が「古今和歌集」卷一七の和歌から「紫」を恋人の女性として詩の言葉に用いたと注釈できる。一方で、紫は藤の花の色でもあるため、当時の藤村が詩を仙台で書く最大の影響をもたらした佐藤輔子の苗字にある「藤」から紫の連想に通じ、「相思」の詩には佐藤との関係が背景にわかりやすいことも挙げられる。

第一連の第三句と第四句では、恋人の女性の歩く姿が、美しい花や鳥のそれになぞらわれているが、女性の恋人である彼にしてみれば、彼女の足は彼女のためというよりも、彼に従って歩く、その姿が彼女の歩く行為の本意なのだ、彼には感じてしまう。彼なしにはまるで彼女は歩くことが彼女らしくない、そんな風に男性は恋人の女性を見つめている。

それほど彼女に恋をしている男性の日常の一こまを、第二連

では伝えている。黄昏時に、外を歩いて居る男性が空を見上げると、黄昏の時間帯の故に色彩も模様も美しい雲が浮んでいた。しかし、彼の眼にはただの美しい自然現象ではなく、巻物を巻いては次の展開を見るためにその巻物を先へと開き、読んで行く絵が描かれた巻物の書籍のように彩雲が見える。また、お酒を飲めば美味しさを感じるだけでなく、恋をしている故の物思いや、一見沈んでいるかのように考え深げに留まっている恋の感情、そういう胸のうちにいる彼を、飲んで美味しさを感じることで、お酒もまるで彼女との恋愛を良い状態と褒めていのように男性はお酒を飲みながら思ってしまう。黄昏時の散歩も、お酒を楽しむ行為も、日常を送りながらも、彼の心の中にはいつも恋する彼女への深い想いがあり、日常の過ごし方に生き生きとした美しさや喜びを与えている。

第一連では彼女を、第二連では歌い手の彼が自分自身を間接的に紹介していたが、第三連において二人が一緒に居る時の様子が語られている。「歌神」は和歌の神を指す。住吉大社（大阪）と玉津島神社（和歌山）が和歌の神と言われるが、ここでは恋人の女性を歌神に譬えていると考えられる。室町時代の日本語資料である抄物の「玉塵抄」（永禄六（一五六三）年）三五「環」に、玉の簪を、歌を上手に歌う女性になぞらえる記述がある。そのような女性を「歌姫」と同書では記述している。「相思」第三連では、恋人の女性を「歌姫」ではなく「歌神」と表記したのは何故であるのか、単純に藤村が和歌の神である「歌神」という言葉を知っていたに過ぎないのか、或いは敢えて神の位置に女性を置いたのか、という問題が湧きおこる。同

連では、彼が彼女と同じ空間に共に居て、恋心を互いに、歌を歌うことで伝えあっている。詩全体の歌い手である男性は、第一連にも書かれているように、女性の様子をそのまま、まずは受け入れるのであるが、彼女への支えの視点と基軸は男性の思うままに一貫している。第二連までで既に、彼にしてみれば、恋人の女性は紫草の白い小さな花であり、美しい鳥であり、彼の日常に絵巻物の世界や酔いの楽しさを展開させる、極めてロマンティックでドラマティックな存在価値に昇っている。その流れで考えれば、彼が恋人を神聖化するほど、彼女の美しさや恋心を慕っていると解釈できる。

しかしながら、「相思」のポイントは第四連で彼が語る、彼女の彼への深い恋愛感情にある。男性の「若き愁」と女性の「涙」は一致する内容である。男性からすれば、恋人の女性も自分と同じように、一見悲しいことが起こっているかのように考えに沈んでいると見えるほどの恋の感情が生じていること、それは自分の彼女への恋心に勝ると男性は伝えている。彼にとつては、恋人の女性の涙を見て、自分達二人が相思なのだと知るに至る。その意味では、女性の恋心が男性には貴重であり、自分の心はそれに及ばない、という、歌い手の男性の素直で、女性とはまた異なる深い恋愛感情が映し出されている。

「相思」の次に置かれた「一得一失」では、女性の涙がやはり歌われる。

一得一失

君がこころは蟋蟀の／風にさそわれ鳴くごとく／朝影清き
花草に／惜しき涙をそそぐらむ

それかきならず玉琴の／一つの糸のさわりさえ／君がこころにかぎりなき／しらべとこそはきこゆめれ
あなどかくは触れやすき／君が優しき心から／かくばかりなる吾こいに／触れたまわぬぞ恨みなる

第三連で示されるように、男性の女性への片思いを歌った詩である。女性の涙は、男性にはではなく、朝日の光を受けて清々しく咲く花に向けられている。また、第二連では女性が琴を弾く様子が書かれており、女性の動作はすべて、男性には目もくれない様子である。しかしながら、彼は彼女の動作ではなく、その動作を起こしている時の彼女の心に注目している。花を愛で、琴を弾く、一見何でもない女性の行為に、男性が女性のもとも、彼と彼女との間で、年単位の長い時間、一緒に居たという何らかの関係性が成立していたことが考えられる。友人関係、先輩後輩や師弟などの上下関係、いろいろと背景を読めるが、男性が女性よりも年上で成熟していないと、女性の普段のパターンに対して、彼女の本質を読む理解は得られない。恋愛詩には藤村の佐藤輔子への恋愛感情が反映されており、「一得一失」でも、藤村にとつては、明治女学校の教員の島崎春樹として授業で教えた佐藤への見方という、教師と学生という上下関係から個人としての感情へ流れて行ったことが、男性から女性への、想いの機微の歌われ方の背景に含み取れる。

第一連の第三句「朝影清き花草」のフレーズは、「万葉集」をヒントにしている。「早春」（定本版『藤村文庫』第三篇（昭和一一（一九三六）年四月二八日 新潮社））の中で、藤村は

「朝影清き花草のごとき言葉の使いさまも、万葉集をさぐって試みたものであった」と記述している。「万葉集」巻十一の「朝影に我が身はなりぬ玉かきるほのかに見えて去にし児ゆえに（二三九四）」では、男性の女性への届かない恋心が詠まれる。「一得一失」でも、女性が男性の恋心には「触れたまわぬ」、感受性を合わせないという、やはり届かない恋へのがっかりした気持ち歌われており、詩の題材とした「万葉集」の恋の世界と通じ合わせる内容である。

ただ、「一得一失」では、男性が自分の恋心を彼女に向って伝える時には「たまふ」という敬語を突然使いながら、「恨み」という心中の強い表現をぶつけている。彼と彼女との間では、既に長い間の関係性があり、親和性もある故に、彼女が、感じやすく優しい心を彼にストレートに表出してくれないことは、彼にとつてはまるで納得できない。彼女との間を思い返せば、怒りが湧き出るほどに、甘さや優しさが関係性の雰囲気にあつたためと考えられる。また、彼女の繊細さを受け入れてきた彼も優しい心の持主であることが窺える。

詩人の蒲原有明は、「万葉集」からのヒントを得て作られたこの詩について評価している。蒲原とは、明治三五（一九〇二）年から始まった龍土会で藤村は顔を合わせる。龍土会は、麻布にあるフランス料理店の龍土軒で、毎月九日にフランス料理を頂きながら行われた芸術家（美術家や文学者）の会合である。蒲原は、国木田独歩や柳田国男、中沢臨川といった主要メンバーの一人であった。蒲原と言えばロッセッティの翻訳詩や自詩へのその影響において有名である。鏡味國彦氏によれば、蒲

原がロッセッティを知った最初の契機は、藤村の第二詩集「一葉舟」（明治三二年六月一五日 春陽堂）所収の「西花余香」第六章にあるロッセッティの紹介文によってであった。「新生」第一巻の序の章に語られる「中野の友人の手紙」とは、蒲原の手紙を題材にしている。また、同書第二巻の百一章に載せられているロッセッティ翻訳詩「生命の家」は、藤村のために蒲原が特別に翻訳したものである。このように、仕事上で蒲原は藤村を助けているが、藤村にとつても、貰い受ける手紙の中で蒲原のものを大事にしたり、自分の子どもを託す上で蒲原にお願いするなど、個人上での信頼関係があつての自然な成り立ちでもあつた。

「一得一失」で、蒲原が印象に残ったフレーズが「朝影清き花草」という詩の言葉の使い方にあつた。「朝影の句」として蒲原はこの詩をまとめており、このフレーズが詩の恋愛観と直通していることを見抜いていたことになる。

「えにし」では「相思」「一得一失」同様に、花が歌われる。

えにし

わが手に植ええし白菊の

おのづからなる時くれば

一もと花の暮陰（ゆうぐれ）に

秋に隠れて窓にさくくなり

関良一氏は、白菊の花が「若葉集」全体の詩群を指している」と注釈する。従つて、表題の「えにし」は詩の新しい表現が開花する時期と繋がること出来た縁、という意味になる。詩の構成としては、「相思」「一得一失」「傘のうち」次に「えにし」

が配置されている。「傘のうち」は近松門左衛門の浄瑠璃を詩の背景とした恋愛詩である。また、「えにし」の次に置かれた「知るや君」も恋愛詩である。「えにし」と「知るや君」には連動した構成上の関係内容があり、「相思」と「知るや君」との間にも連動したそれがある。以上の点から、「えにし」は恋愛詩に相当すると考えるのが自然な解釈と思う。

表題の「えにし」が男女の縁を意味する原典は、「伊勢物語」第六九段「狩の使」に同語が初出されたことに拠る。「伊勢物語」全一二五段のうち、最重要とされる段は、六九段であると言われる。主人公である男性（在原業平）と、男性との愛情関係は全くゆるされていない立ち位置にある伊勢の斎宮である女性（恬子（やすこ）内親王）とが、恋愛関係に陥るという内容が、「伊勢物語」の中心内容であり、また同段から物語が始まる伝本があるなどから、作品名が六九段に由来すると、定説として考えられているためである。藤村は「文学界」時代のこの時期に、同誌の仲間たちと外国文学の撰取のみならず、日本の古典文化を探求、再評価していた。これまで取り挙げた藤村の恋愛詩は、古典文学の背景があることを随時述べてきたが、「伊勢物語」については、「文学界」時代（二一歳より）から晩年まで関心を持ち続けている。最後の第六感想集「桃の雫」（昭和一一（一九三六）年六月五日 岩波書店）の中で、「業平はわたしが好きで好きな古人の一人だ。あの和歌の高い香気は、おのづからしてロマンチックなものだ」（回顧）と在原業平を好きな歌人と明言している。同年九月五日より一五日までアルゼンチンで開催された国際ペンクラブ大会には、日本会長とし

て出席する。その際にブラジル日系の子どもたちのために「大和言葉の碑文」として、柿本人麿、源実朝、西行と共に、業平の和歌を選んでいる。「回顧」では、業平と「伊勢物語」との関係が挙げられる箇所もあるが、藤村としては、業平の和歌によって、彼に惹かれるという、歌人と詩人と職種での同じ目線や、ロマンティックな言葉の調子を好む者同士、といった、在原業平自身への興味が強いことが文中からは読みとれる。

白菊は男性が恋して居る女性である。男性は主体的に自分の方法で、彼女との関係性が恋の縁へと育つように、彼女の身上に手をかけてきた、というのが第一句の内容となる。「伊勢物語」第五一段「菊」には「植えし植えば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや」という和歌がある。「古今和歌集」巻第五「秋歌下」二六八番では、業平の和歌として載せられている。「植えし植えば」は、自分の手でしっかり植えた白菊なので、と訳出でき、「えにし」第一句めは、近代日本語表現として大変類似している。藤村は「伊勢物語」同段の業平の和歌を「えにし」の参考歌としていたことが考えられる。

白菊は、秋の終わりの夕方に、誰の眼にもつかない窓辺で開花する。第三句の「暮陰（ゆうぐれ）」は、「文学界」初出では「ゆうかげ」とルビがふられていた。「若菜集」に出るにあたり、「ゆうぐれ」に書き改めた訳であるが、本来は夜が迫りくる夕方の時間に花開く設定をしていたことがわかる。また、「早春」では表題を「えにし」から「秋に隠れて」に変更させている。「隠れて」は陰、すなわち（一）後ろ、終わりの方で（二）人の眼にふれずに、秘かに、の二通りの解釈を重ねてい

る。秋と開花との、物理的・空間的時間設定に意味を与えている。

「秋に隠れて」は「えにし」の内容に相当するため、藤村は表題に選び直したと思われる。詩中にある男女二人の関係は、秋の後半に、人目にはつかない時間と空間のうちに、彼女が自然に心を開いたことで、秘かに恋の縁となった、ということが、第三句、四句の白菊の開花表現に対して、具体的に告げられた意味内容である。

『伊勢物語』第六九段「狩の使」もまた、女性（恬子内親王）が斎宮として伊勢へ下向したのが十月五日の残菊の宴の日であった。菊は九月九日の重陽の宴で不老長寿のシンボルとして祝われる花であるが、翌十日になると残菊と呼ばれ、香りの良さ、色の変化を賞美され、十月五日の宴に通じる。第七三段「月のうちの桂」で、秋の終わりから冬の初めの歌言葉「月の桂」を斎宮の女性（恬子内親王）に譬えて、手紙すら書けず、彼女に逢うことがかなわない思いを表現した、男性（業平）の和歌があり、季節の特定は七三段でも可能である。「えにし」の背景に『伊勢物語』が考えられるとしても、当時の若い藤村が同作品をどの程度読み込んでいたのか、という問題提起が生じる。重陽の宴や残菊、月の桂は素養として知って居た可能性があることは「文学界」掲載の初期の文章から既に予想されるのであるが、通常では全く考えられず、まずもって滅多にないからこそ、人智に抛らない定め結びつきが男女の人間関係にはある。それが聖域、神域で起されたことで、本来の男女の結びつきも皆そのようであることが本意、という、深い神秘の内

容を、藤村は『伊勢物語』第六九段から読んだ結果を「えにし」に歌ったというのが自然であろう。それは、キリスト教信者であり、既婚者であった佐藤への恋愛感情による共感である。「えにし」の次に置かれている「知るや君」は、先に述べたように「えにし」と連続して考えられる恋愛詩である。

知るや君

こころもあらぬ秋鳥の／声にもれくる一ふしを／知るや君
深くも澄める朝潮の／底にかくるる真珠（しらたま）を／

知るや君

あやめもしらぬやみの夜に／静にうごく星くづを／知るや

君

まだ弾きも見ぬをとめこの／胸にひそめる琴の音を／知る

や君

この詩の特徴は、「知るや君」の言葉に、句ごとで常に特別な改行を施している点である。何を知って居るのか、という問いかけの内容が詩のホットスポットであることを意味する。歌い手の男性が一番伝えたい問いかけは、第四句にある、彼が好きたと思つて居る女性が胸に潜めている恋の気持ちにあふれた言葉についてである。これを伝えたいために、第一句から三句までの問いかけが、彼には必要だったことになる。無心に鳴く秋の鳥、朝の海の水に流れて、母貝に生れている真珠、夜の時間に静かな風情で天空を移動する星、これらはすべて女性を譬えた景物である。

真珠に「しらたま」とルビをふつているのは、藤村が心惹かれた用例があつたためであろう。真珠を「しらたま」、白玉と

漢字表記するのは、『伊勢物語』第六段「芥河」に「白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましものを」という男性（業平）の和歌が該当する。「知るや君」は「えにし」と共に「秋の夢」を表題として「文学界」四七号（明治二十九年一月）に掲載されている。相関関係が二つの詩には初出時よりあった訳であるが、『若菜集』に収録する時には『伊勢物語』を背景として、二つの詩を同じ男女の関係を歌った内容に構成していることが考えられる。

『伊勢物語』第六段で業平が歌う女性は、深窓育ちである。

「「こころもあらぬ」ように邪気がなく、まだ見つけられていない寶石の「真珠」のように育てられ、「あやめもしらぬ」ように分別はつかずに静かである。「星くず」のように、まだ役には立たない段階であるものの、光り輝いている麗しい存在、それが詩の歌い手である男性が恋い慕い続けて来た「おとめ」である若い少女のような女性である。「えにし」では、男性が彼女との関係を、自分の方法で恋の縁へと育て、彼女は自然に、彼以外には誰も知らない時空のうちに、彼には心を開いたという解釈へと論じてきた。その続きとして、「知るや君」を読むと、次のような展開が予想される。男性にとつては、好きで関わって来た女性と思いが通じたので、この喜びや驚きを誰かに伝えたいと思い、「君」を選んで問いかけた。「君」とは広義で読者を指すが、「えにし」からの物語性で読み解くと、一般的に男性を尊ぶ呼び方としての「君」を考え、歌い手の男性が尊敬して信頼できる男友達、と考えるのが自然であろう。彼女がまだ若く未熟であっても、彼にとつては彼女がどんなに素晴ら

しいのか、説明が必要となる。第一句から三句までは、恋しい女性をイメージした景物で彼女の麗しさを歌うため、男性の独壇場としての詩の言葉であるが、彼にとつては、彼女が自分と同じ心を通じてくれたことが一つの〈事件〉であったという意味に導く。

二人の関係は、確実に恋愛の結びつきになっていくことを、男性は彼女の様子から予感している。「琴の音」は恋愛の言葉を指す。「音」は、おさえられずに自然と出てしまう性質を持ち、特に、まだ発せられてはいない状況での人の声を意味する。従つて、彼は彼女が自然に心を開いてから、彼女が彼に示す普段のしぐさや態度、恋を伝えない日常の言葉を語る彼女の声、それらの奥には、彼への恋の気持ちをおさえきれずに自然と伝えてくる、彼を好きであるという彼女の声を、彼も彼女の普段の麗しいと感じる様子から心で感じ取り、既に比喩的に（聴いている）ことになる。彼に恋をしていると告げる、この彼女の声すら、「知るや君」と彼の男友達に問いかけることは、尋常ではない。勿論、歌い手の彼だけが知っている真実であり、この詩中の問いはすべて歌い手の彼だけが、これからも唯一の知者となる。男性は友人に、自分と同じように、このような経験を味わったことがあり、経験を通しての心情がどのようなものであるかを知っているかと尋ねたというよりも、彼自身が相思となりたかつた女性と恋愛感情が通じているという、ドラマティックでロマンティックな驚きを知ったことそのものを語りたかつたと読める。

このように、詩群の構成を連続した内容と捉えての観点から

詩を読んだ場合、散文的な展開が起り得る。藤村が韻文から散文へ移行した後、晩年まで詩集を六回も改編したことは、自作の詩に彼の言葉の独自性や特質があり、小説へと発展させる物語性が強いためである。藤村が詩を書く契機は佐藤輔子への恋愛感情に拠ると述べた。佐藤の日記から明らかなのは、まるで聖職者のように、敬虔な信仰心の持主であった点である。当時、藤村もキリスト教の洗礼を受けるが、師弟関係でありながら個人同士として佐藤と恋愛感情を抱いたことへの煩悶と、それに加えて信仰と両立させることへの葛藤、すべてが精神的に強い負担のある問題として、若い藤村の人生に押し寄せた。支障を感じさせるのは、藤村と佐藤との間にキリスト教信仰という聖域が存在していた点である。藤村は苦しさのあまり、プロテストメントからは離れる。それ故、気持ち自由になり、彼は佐藤への恋愛感情を詩の言葉で表現するまでに至るのであるが、「文学界」時代のこの時期に、藤村は日本の古典文学や西洋の文学の中に、聖域や神域と共にある恋愛関係の作品を見出していく。「新生」で重要な芸術表現とされるロセツテイ翻訳詩「アペラールとエロイズ」に、「文学界」時代のこの時期に藤村は出会い、第三詩集「夏草」（明治三一（一八九八）年二月六日 春陽堂）中の詩「天の河二首」で取り挙げる。同種に近い形で、「若菜集」では、「えにし」「知るや君」の連続した構成の背景に「伊勢物語」、特に第六九段を題材とした流れを組み立て、取り挙げているのではないかと考える。

『若菜集』から『落梅集』までを合本した『藤村詩集』（明治三七（一九〇四）年九月四日 春陽堂）では、新たな序が書か

れる。「新しき詩歌」と藤村は自作の詩を表現する。詩歌と書くように、全詩集では、近代日本語の自詩のみならず、漢詩・和歌・俳句も自作の詩の表現として登場する。それは「詩を新しくすることは、私にとって言葉を更新すると同じ意味であった」（「自伝」）と晩年に書く通り、新しい言葉が彼の詩のテーマであった。藤村は、同文の中で、新しい言葉を生むことが『若菜集』の出発点と明記している。

三好行雄氏は、『若菜集』における和歌への傾きを重視している。『若菜集』として開花する数々の詩を書く前、「韻文に就て」（『太陽』第一卷一―二号（明治二八（一八九五）年二月五日）の文中に、和歌の限界を伝えていた彼は、和歌を超えた言葉の世界を自作の詩に展開させる思いがあった筈である。しかし実際は、和歌を詩の言葉の背景とすることにより、新しい言葉は誕生していった。三好行雄氏は、和歌的世界の外へ拡張することがなく、却って和歌への接近が、『若菜集』における詩語としての〈新しい言葉〉をもたらしたと指摘する。細川正義氏は、三好氏の論考を、藤村自身の〈人生の春〉の視点から同感している。藤村自身、「私は仙台へ行った。（略）私の生涯はそこへ行って初めて夜が明けたような気がした」（改訂版『藤村詩集』（大正元（一九一二年）二月一〇日 春陽堂）と、仙台在住がたった一年間でありながら、自分らしい人生の軌道に乗ったことを感じた明るい時間であったことを述べている。彼が仙台で詩の言葉を表現したことは、個人の自然な生き方に則りながら、古代からの日本人の抒情性とも合致したことになる。そうであるならば、藤村が自分の恋愛体験を契機に詩を生

み出したことは、言葉が「言の葉」である和歌の恋の歌からの正統な流れに乗り、近代日本語としての新しい言葉を恋愛詩から誕生させたと言えるだろう。

- 注1 関良一注釈「若水」第三項（日本近代文学大系15「藤村詩集」(昭和四六年一二月 角川書店)）
 - 2 平岡敏夫「文学界」事項（伊東一夫編「島崎藤村事典」改訂版(昭和五一年九月 明治書院)）。
 - 3 片桐洋一「なつよ(夏夜)」事項（片桐洋一「歌枕歌ことば辞典」増訂版(平成一六年二月 笠間書院)）。
 - 4 片桐洋一「むらさき(紫)」事項（注3に同じ）。
 - 5 大塚光信編「新抄物資料集成」第四巻 五六頁下段（平成一二年八月 清文堂出版）。
 - 6 鏡味國彦「ロセッティと蒲原有明」(「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティと明治期の詩人たち」三章(平成二年九月 文化書房博文社)）。
 - 7 関良一注釈「糸にし」第十項（注1に同じ）。
 - 8 「えにし(縁)」事項（精選版「日本国語大辞典」第一巻(平成一八年四月 小学館)）。
 - 9 福井貞助「伊勢物語」解説（「新編日本古典文学全集12(平成一一年三月 小学館)）。
 - 10 藤村の蔵書目録（千代田区下六番町一七の自宅内による蔵書）には、上田万年、山本信哉、平田盛胤共編「平田篤胤全集」(昭和七年一二月内外書籍株式会社)が載せられている。藤村が晩年において在原業平や
- 11 「伊勢物語」に言及するのは昭和十年(一一年頃であるが、平田篤胤は「伊勢物語梓弓」という「伊勢物語」注釈書を書いており、「全集」に収録されている。「伊勢物語年譜」(注9に同じ)。
 - 12 「きく(菊)」「しらぎく(白菊)」「ざんぎく(残菊)」事項（注8に同じ）。
 - 13 片桐洋一「つきのかつら(月桂)」事項（注3に同じ）、「つき(月)」事項（注8に同じ）。
 - 14 三好行雄「詩人藤村「若菜集」の世界」(「三好行雄著作集」第一巻「島崎藤村論」(平成五年七月 筑摩書房)）。
 - 15 細川正義「若菜集」の世界」(「日本文芸学」第一一号(昭和五一年十月 日本文芸学会)）。
- (本学大学院第一回修了生、
国語国文学科研究室勤務)